

令和元年6月14日現在

機関番号：16101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02493

研究課題名(和文) 十八世紀イギリス新聞投稿詩におけるライター・読者共同作業

研究課題名(英文) Collaboration between Writers and Readers in the Anonymous Poems Submitted to the 18th Century Daily Newspapers

研究代表者

田久保 浩 (TAKUBO, Hiroshi)

徳島大学・大学院社会産業理工学研究部(社会総合科学域)・教授

研究者番号：20367296

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：1787年から2年ほどの期間、ロンドンの日刊紙The World: Fashionable Advertiser紙上で展開されたデッラ・クルスカ派と称される匿名新聞投稿恋愛詩のブームについて、文学とメディアとの関係において調査を行った。イタリア中世のロマンスの主人公を気取りながら、匿名の男女が新聞紙上での詩の交換によって赤裸々な男女の恋愛感情を吐露するという現象は、性差、階級を超えて、読者が活字を媒体としたメディア上において共感によって結ばれたコミュニティ形成の出現を示す。この十八世紀の出版メディアが生み出した状況は、基本的に現代においてインターネットが果たす役割と共通するものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

デッラ・クルスカ派の詩については、イギリス・ロマン派詩人たちへの影響という観点から1950年代より散発的に研究がなされてきた。しかしながら、日刊紙が媒体となり、匿名の男女、社会階層も単一でない読者たちが、新聞紙上の恋愛詩の交換によって展開される劇場空間を共有していたことに注目する点において、本研究の独自性がある。不特定多数の人々が共感によってつながることがメディアの特徴であり、インターネットの登場するはるか以前よりメディア上のコミュニティが存在していたことを指摘することは現代文化およびメディアの役割についての理解のためにも意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study on Della Cruscan love poems that appeared on a London daily newspaper, The World, in late 1780s focused on the relationship between literature and the media. The exchanges of love poems by anonymous men and women on the daily newspaper created a theatrical love affair in progress that was simultaneously shared by all the readers. John Brewer had pointed out that the entire cultural phenomenon of Sensibility resulted from the development of print media in the eighteenth century. The print media united readers across sexes, classes, and geographical divides in shared appreciation of common feelings. This study demonstrated the connection between the media and literature with a particular group of writers associated with a newspaper. This phenomenon in the late 18th century shows that the role of the present day internet to create communities has its precedence in the print media during the eighteenth century.

研究分野：イギリス文学、18世紀文学、19世紀文学、イギリス詩、メディア研究、物語理論研究

キーワード：イギリス文学 メディア研究 イギリス18世紀 イギリス19世紀 イギリス・ロマン派 イギリス詩

1. 研究開始当初の背景

ロマン派文学を、それに先立つ十八世紀末の感覚の文学(Sensibility)および啓蒙思想のコンテキストに位置づけようとする試みが始まるのは 1950 年代以降である。トマス・グレイやウィリアム・クーパーらの詩が見直され、ゴシック小説についての再評価も行われる。この研究動向をさらに加速することになったのが、それまでの文学カノンの再構成を迫る 1980 年代以降のフェミニズム、文化研究によるもので、十八世紀末の女性作家、女性詩人、同時代の文化状況に新たな光が当てられることとなった。

以上の研究史の流れの中で Edward Bostetter, W. N. Hargreaves-Mawdsley らがデッラ・クルスカこと、ロバート・メリー (Robert Merry, 1755-1798) について、ロマン派の先達としての再評価の土台を築いたのを受けて、ポスト構造主義ロマン派研究の主要な論客の一人、ジェローム・マクガンは、*The Poetics of Sensibility: A Revolution in Taste* (1996)において、ワーズワースらロマン派詩人らの登場に先立って、感性の詩人たちにこそ、現代的文学感性に向けての革命的变化が見て取れることを指摘すると同時に、デッラ・クルスカ派の詩が特にキーツに顕著な影響を与えていると論じた。Judith Pascoe (1997)ら十八世紀末のクルスカ派についての研究が深まりを見せる中で、日本で研究する Steve Clark らも、ロバート・メリーら、イタリア文学に影響を受けたデッラ・クルスカ派こそがイギリス・ロマン派の起源の一端であるという議論を展開し、クルスカ派研究への関心は世界的な高まりを見せていた。

2. 研究の目的

1787 年から 2 年足らずの間、ロンドンの日刊紙 *The World* 上で展開されたデッラ・クルスカ派(Della Cruscans)の恋愛詩は、いくつかの点で興味深い文化現象である。第 1 に、現代のインターネット上のメディアを先取りするかのように、新聞紙上で恋愛歌の交換が行われ、そこでの模擬恋愛の進展がさらなる恋愛歌の投稿を促し、ブームとなったことである。匿名の投稿によりメディアに人気集中する現象は、現代のインターネット上の言説と比較できる。第 2 に、その恋愛歌の複数の主要投稿者がフランス革命を支持する急進思想の持ち主だったことである。第 3 に、彼らの詩が、キーツを始め、パイロン、シェリーらの第二世代ロマン派の詩に影響を与えている点である。本研究はこのデッラ・クルスカ派による新聞投稿詩のブームについて、メディア現象として、その背景、展開、衰退の過程と後代への影響について探ろうというものであった。デラクルスカ派の詩をめぐる言説を分析するなかで、そのメディア性、政治的急進思想、恋愛歌の感覚的表現との間の関連について、関係を明らかにしようとするものであった。

3. 研究の方法

本研究は、主たる対象となる作品群について、発表された媒体自体を調査することが必要である。大英図書館の Burney Collection(電子版)を利用し、新聞紙面について、広告、記事、その他の情報について、その割合を集計すると同時に、投稿詩の前後ページの記事、さらには投稿詩を発表日ごとに整理して、ディスコースとして調査する。これに加えて、他の雑誌等の資料も、できる限り一次資料を検索し、調査する。同時にクルスカ派ないしその周辺についての歴史的、文学的資料を収集し、調査する。初年度は *The World* 紙とそれに関連する資料を中心に、次年度以降はクルスカ派の及ぼした影響について、十八世紀末、十九世紀初期の雑誌等の資料調査を中心に、研究を進めた。

ロンドンで発行された各新聞 *The World*, *The Oracle*, *The Morning Post* 等の紙面について、1787 年から 1790 年の時期を中心に調査を行う。アナ・マチルダ、ローラ・マリア、ベネディクトといった様々なイタリア風のペンネームを用いたデッラ・クルスカ派と称される一群の投稿者による詩歌について、紙面のコンテキストとの関係に注目しながら検証する同時に、これらの新聞の出版や編集にかかわったり、記事を提供した人物たちについて、資料を取集し、調査する。全体の調査は以下の 3 方向による。

(1) *The World* ら、デッラ・クルスカ派の投稿詩を掲載した各紙の紙面分析を行う。Burney Collection(電子版)を利用し、新聞紙面についての調査、記録を行った。

(2) 各紙に掲載されたデッラ・クルスカ派と称されるロバート・メリー、ハナ・カウリー、メアリー・ロビンソンら投稿者たちの詩歌、および *The European Magazine* などの雑誌等に採録されたり、*The Florence Miscellany* (1785)等単行本として出版された詩歌。さらに投稿者たちがデッラ・クルスカ派とは別に発表した詩について収集して調査した。

(3) *The World* を出版した John Bell (1745-1831)、編集者 Edward Topham (1751-1820)、デッラ・クルスカ派の主要な投稿者ロバート・メリー、ならびに彼とのかかわりの深い William Parsons (? -1828)、Hester Lynch Piozzi (1741-1821)、およびデッラ・クルスカ派の他の主要な詩人、Hannah Cowley (1743-1809)、Mary Robinson (1758-1800) らについて、その伝記的資料を集め、調査する。さらに当時の出版状況、政治・文化状況について、文献を調べた。

4. 研究成果

(1) 日刊紙 *The World* について、対象とする2年間の紙面を閲覧し、記録と分析を行った。その結果明らかになったことは、十八世紀後半の日刊紙の役割である。演劇舞台、コンサート等のイベントについての情報や、政治短信、貿易関連情報、商品広告、有名人消息についての報告等、様々な情報が限られた二つ折り4面の紙面に凝縮されている。女性劇作家ハナ・カウリーは、この中からデッラ・クルスカによる詩を見逃すことなく、すぐさまそれに応じて、アナ・マチルダのペンネームで変化を送ったわけだが、この雑多な情報を集めた紙面を丹念に読んでいたことがわかる。『クオータリー・レビュー』誌の初代編集者ウィリアム・ギフォードが「バヴィアッド」にてデッラ・クルスカ派を激しく攻撃した事実から、この一派が相当な影響力を持ち、紙面においても目立った扱いがあったものと予想していたが、詩が掲載されるのは第3面の一角にすぎず、詩が掲載されない日も多い。以上の調査結果からわかるのは、十八世紀後半にあった、ロンドンの20紙ほどの日刊情報誌の果たすメディアとしての役割である。ロンドンの消費生活を支える市民にとって日刊紙は中心的な情報源であり、読者は競ってこうした日刊紙を手に取り情報を共有することで公共圏を形成していた。さらに、この新聞の役割を補うのが雑誌であり、新聞紙上で発表された詩を採録し、そして新聞、雑誌紙上で好評を博した作品はさらに単行本の形で出版され、それらが新聞広告により宣伝され、版を重ねることにより広範な読者を獲得するというメディア状況を明らかにした。

(2) 大英図書館のデータベース資料について記録の増補作業を行うと同時に、雑誌に掲載されたデッラ・クルスカはと称される一連の作家たちによる詩歌や彼らについての書評記事について、データベース、インターネット・アーカイブ、書籍等から収集を行い、さらにこれらの作家についての現代の研究資料を収集した。また、関連する十八世紀イギリス文化、出版史、文学関係の図書を収集して研究を進めた。これらの資料や研究からの成果の一部は、イギリス・ロマン派学会における口頭発表「デッラ・クルスカ派の表現とイデオロギーおよびロマン派への影響」および研究論文「デラクルスカ派の詩における感受性のイデオロギーと十八世紀メディア」(『言語文化研究』25号)において公表した。この中で、特に John Brewer (2009) の指摘を踏まえて、感受性 (Sensibility) の思潮の成立には出版メディアの確立が不可欠の要素であったとする見解を踏まえて、デッラ・クルスカ派を Sensibility の文学の中でとらえ直す視点が成果として挙げられる。

新聞紙上のデッラ・クルスカ派ブームは、メディア上での読者同士の身分改装や性別を超えた共感の現象の顕著な例であり、現代のメディア言説と共通するメディア現象であるという事実が明らかになってきた。この事実は十九世紀初頭のロマン派文学研究を見直す必要をせまるものである。なぜならこれまで個々の詩人ごとに研究されていたロマン派詩を十八世紀末からの出版メディア全体のコンテクストからとらえ直すことで新たな同時代の文学状況の姿が見えてくる可能性を示唆するからである。デッラ・クルスカ派についての研究を通じて、特に十八世紀後半よりイギリスにおいては女性作家の活躍が著しかったという事実が見えてきた。十八世紀後半の女性詩人たちは、ミルトンの詩の韻律に倣い、男性による詩よりも韻律が自由で、実験的であり、形式的にはコールリッジ以降のロマン派の詩人たちの先駆者ともいえる。いったいなぜ、こうした女性作家たちの存在がこれまで見過ごされてきたのかという興味深い問題の発見もこれまでの研究の成果として挙げられる。彼女たちの多くの作品が後のワーズワース、コールリッジ、シェリー、キーツらの作品の背景となっている。十九世紀後半以降のロマン派受容においてはこうした先行する女性詩人たちの存在が忘れ去られてしまったわけであるが、もういちど同時代の言語的、政治的、社会的コンテクストにおいてロマン派の文学を見直すことを試みたい。Ashley Cross による、*Mary Robinson and the Genesis of Romanticism* (2017) は、メアリー・ロビンソンの詩における他の作家たちとの対話の姿勢が、以降のロマン派の詩人たちに受け継がれた要素として論じる意欲的な新しい試みであり、参考となる。

(3) これまでの研究から、デッラ・クルスカ派の新聞投稿詩としてのメディア性に注目して調査するなかで、読者同士を社会的階層や性差をこえてつなげるというメディアならではの特質を見てとることができた。同時に読者を意識した劇場的な自己演出が可能であるという特質もメディアならではのものである。十八世紀になり印刷媒体としてのメディアが初めて確立するわけであるが、他人が自分の経験を文章にして公開した時にそれにたいし不特定多数の読者がそれぞれ自分の経験と重ねて共感することが可能となるのである。十八世紀の「感受性」の思

潮は、こうして印刷メディアが確立して初めて可能となった。デッラ・クルスカのブームは 1789 年のフランス革命を機に中心的な詩人、ロバート・メリーが革命というテーマに没頭し、恋愛詩の投稿を放棄したことを契機に、恋愛歌の交換が行き詰まり、その幕を閉じる。しかし、1792 年になっても彼らの詩を集めた *The British Album* の増補版第 4 版が出版され、さらに彼らの恋愛詩を待ち望む詩が新聞に載るなどの事実は、デッラ・クルスカ派の詩をめぐって形成された詩の作者と読者を含めたコミュニティの失われることについて惜しむ声の反映と考えられる。そうした声は 1793 年以降、打ち消されてしまうように見える。その大きな原因はフランスとの開戦による思潮の変化と考えられるが、この思潮の変化を新聞、雑誌の言説の中から裏付ける作業は課題として残る。

(4) デッラ・クルスカ派の核となったロバート・メリーという詩人について、これまで、その詩を集成する作業は行われていない。本研究の中で、新聞紙上以外には発表されていない複数の詩を記録した。ハナ・カウリーによる詩についても新聞以外に収録されていない作品がある。こうした作品を総合して、さらに、デッラ・クルスカ派を経て 1790 年代の主要な詩人となったメアリー・ロビンソンを含めた詩人たちを文学的に評価する作業はまだ端緒に就いたばかりである。十八世紀前半からの「共感」や「感受性」の感性のコンテクストに置いて、これらの詩人の文学的評価についての検証が課題として残っている。

(5) 本研究における十八世紀のイギリス文学についての見地を活かすべく、そこから多大な影響を受けた夏目漱石についての論考を、漱石生誕 150 周年記念の学会および論集に発表した。また、十八世紀文学の影響を強く受けたロマン派の主要な詩人コールリッジの「老水夫行」のテーマを踏まえたコンラッドの作品『闇の奥』についての解釈を発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 5 件)

田久保浩、*遍路と文学 『闇の奥』における旅と物語、キリスト教文学研究、査読無、36 (2019): 15-25.*

田久保浩、*Review: Judith Pascoe, On the Bullet Train with Emily Bronte: Wuthering Heights in Japan, 日本シェリー研究センター年報、査読無、26 (2018): 20-22.*

田久保浩、*デラクルスカ派の詩における感受性のイデオロギーと十八世紀メディア、言語文化研究、徳島大学、査読無、25 (2017): 1-22.*

田久保浩、*ジェイン・オースティン小説の映画化をめぐって、日本シェリー研究センター年報、査読無、24 (2016): 17-18.*

田久保浩、*Review: Alex Watson and Nahoko Miyamoto Alvey, eds., Poetica: An International Journal of Linguistic-Literary Studies 82, Special Issue: Romantic Connections, 日本シェリー研究センター年報、査読無、24 (2016): 14-16.*

〔学会発表〕(計 3 件)

田久保浩、*シンポジウム：文学と巡礼、日本キリスト教文学会第 47 回全国大会、2018 年 5 月 12 日、四国大学.*

田久保浩、*デラクルスカ派の表現とイデオロギーおよびロマン派への影響、イギリス・ロマン派学会第 43 回全国大会、2017 年、10 月 21 日、専修大学.*

田久保浩、*英文学と漱石、夏目漱石国際シンポジウム「漱石は世界をどう読んだか？世界は漱石をどう読んでいるか？」、2016 年 12 月 9 日、フェリス女学院大学.*

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

〔図書〕(計 1件)

佐藤裕子、安倍オースタッド玲子、飯田祐子、大野英二郎、小森陽一、田久保浩、夏目房之介、Keith Vincent, Michael K. Bourdagh, 朴裕河、李広志、林少陽、Lucia Hornedo, 生誕150年 世界文学としての夏目漱石、岩波書店 (2017). 総ページ数 200、担当 43-53.

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。